
Angel Beats! + **オリ主** ~ Another story ~

月下氷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats! + オリ主 ~ Another story

【Nコード】

N5639Y

【作者名】

月下氷人

【あらすじ】

記憶を失った主人公「氷室^{ひむろ}」は目が覚めると、そこは『死後の世界』であった。

そこで『死んだ世界戦線』のリーダー「ゆり」と出会い、無理矢理主人公「氷室」は入隊させられた。どうやら天使のいうことを聞いたりすると消されるらしい。消されないために今日も戦線メンバーは天使と戦うのであった。

これはオリ主介入 + チート? です。苦手な方は戻るボタンを。ヒ

ロインはゆりっぺです。あと私はこれが人生初の小説投稿なので、あたたかい目で見てください。更新は不定期ですが、なるべく毎日投稿できるよう、頑張りたいと思います。

Episode 1

死後の世界（前書き）

どうも初めまして。月下氷人です。最近A B！見てどうしても小説を書きたくなって、つい書いてしまいました。人生初の小説投稿なので、何卒よろしくお願いします。

Episode 1

死後の世界

主人公side

「ん……?」

目が覚めると、俺の視界からきれいな夜空が広がっていた。
なんで俺はこんなところで寝てたのか。そもそもここがどこなのか。
わからないことだらけだった。

「あら、目が覚めたようね」

突然、声をかけられたから後ろを振り向くと、そこにいたのは、黒
のニーソックスを履いた、紫色の短髪の女の子がいた。

「えっと……。どちらさま？」

「そいつのはまず、自分から名乗るもんじゃない?」

「まあ、それもそうだな。俺は氷室だ。下の名前は……。わからない。
い。お前は」

「ゆりよ。みんなからはゆりっぺって呼ばれてるわ。まあ、呼ぶと
きは好きなようによんでくれればいいわよ。よろしくね」

「ああ、よろしく」

とりあえず簡単な自己紹介をした。あと何故スナイパー？を持っているのかは気になるけど、とりあえずスルーしといた。

「とりあえず歩きましょう」

「ちょっと待て！ 俺は聞きたいことが「あ・る・き・ま・し・よ」

「…はい」

「よろしい」

ゆりの言葉から殺意を感じたので、何も言い返すことが言えなかった。

「えっと…。どこに行くんだ？」

「校庭よ」

何で校庭に行くのかわからなかったけど、とりあえずついて行くことにした。

少し歩いて、ゆりは俺に話しかけてきた。

「氷室君。唐突で悪いけど、入隊してくれないかしら？」

「入隊？」

「ここにいるってことは氷室君、あなた死んだのよ」

What? 何言っただこいつ？ 頭がおかしいんじゃないか。

「はあ？ なに言っただこは死後の世界よ。何もしなければ消されるわよ」

「消される？ 誰に？」

「そりゃあ神様でしょ」

もうさっきから何を言ってるのかさっぱりわからない。俺が死んだ？ その時点でわけがわからない。俺は死んだ覚えがまったくない。というより自分の苗字以外何も思い出せない。

「じゃあ入隊って？」

「死んでたまるか戦線によ」

「死んでたまるか戦線？」

「そう。まあ、要するに消されないために戦っていく組織よ。あ、ちなみにもとの組織名は死んだ世界戦線だったけど、それだと死んだことになるんじゃないかね？ってことでいろいろ改名してつた結果死んでたまるか戦線になったのよ。あと新しい名前募集中よ」

「まあ名前はともかく、戦うって何と？」

「天使よ、と噂をすれば」

俺たちはいろいろと話しているうちに、校庭の近くの花壇についていた。校庭には銀髪のかわいらしい女の子がいた。

ゆりは携帯をポケットから出した。

「日向君。天使を発見したわ。場所は

校庭よ。大至急こちらに来て。あと新メンバーゲットよ」

どうやら応援を呼んだらしい。

仮にここが死後の世界だとしても携帯は使えるんだな。

ゆりは携帯をポケットにしまい、あの子にさっきから持っていたスナイパー？を向けた。

「一応聞くけど、それ、本物？」

「あたりまえじゃない」

「何故女の子に銃を向けている？」

「彼女が天使だからよ」

「本当に？」

「嘘ついて何になるっていうのよ」

「まあ、それもそうだけど……」

でもイマイチ信用できない。どう見ても、見た目は普通の女の子にしか見えない。

「誰が信用できないですって!？」

あ、声に出たか。

「女の子に銃を向ける奴が信用できるか！俺はあの女の子にお前の話が本当かどうか聞いてくる」

「はあ！？それ本気で言ってるの！？」

「ああ。本気だ」

「あ、ちょっと待ちなさいよ」

と言って俺は女の子の方に向かった。

＼NO side＼

「ゆりっぺ。今来たぞ」

「あら日向君。来たわね」

「で新入りさんはどこ？」

「あそこよ」

ゆりは校庭の方を指をさした。

「何で天使のところにいんだよ！？」

「勧誘に失敗したわ…」

「何やってるんだよ。で、どうする？」

「まあ、とりあえず様子を見ましょ。どうせ死なないし」

く氷室sideく

俺はゆりの話が本当かどうか確かめるために銀髪の女の子のところに
行った。

「ねえ、その君」

「？」

「なんか向こうにいるバカがお前のこと天使とか言ってたぞ」

「私は天使なんかじゃないわ」

「だよな」

やっぱりそうだった。こんな子が天使な訳がないよな。天使のよう
な可愛い子だけだ。

「じゃああんた何者？」

「私は生徒会長よ」

「そうか。じゃあもう一つ聞いていいか？」

「？」

「ここはどこだ？」

「死後の世界よ」

あれ…。ゆりと同じこと言ってる…。

「は？マジで？じゃあ、証明してみろよ！」

「…handsonic」

女の子の左手首あたりから刃物が出てきた。
そして俺の心臓をめがけてその刃物で刺そうとしてきた。
俺はなんとかよけることが出来た。

「ちょ、あぶねーじゃねーか!!」

「あなたが証明しろと言ったから」

「いきなりそういうことやるか!!」

と言っているうちに、また女の子は俺に切りかかってきた。
暫く俺はよけ続けた。しかし、俺よくよけ続けられてるな。なん
だか体が軽い。動きもよめる。あー、でもだいたいよけることがだる

くなってきた。よし、もう諦めよう。ここが本当に死後の世界なら心臓を刺されても死ぬわけないだろう。多分…。

俺はわざと心臓を刺された。やべっ。思ったよりすげー痛い。そして俺は意識を失った。

これから俺はどうなるのだろうか。

「なかなかやるじゃない、氷室君。あの天使と互角に殺りあうとは…」

Episode 1 死後の世界（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？

小説書くのなかなか難しい。

更新は不定期ですけどなるべく早く投稿できるようにしたいと思います。

Episode 2 死んだ世界戦線（前書き）

ゆりっぺがキャラ崩壊しているような…

Episode 2

死んだ世界戦線

氷室 side

「ん…」

目が覚めると、俺は上半身裸でベットで横になっていた。周りを見ると、どうやらここは保健室らしいな。外を見るともう昼くらいになっていた。

「あれ……？ 俺…」

あ。俺昨日あの女の子…いや天使に心臓を刺されたんだった。証拠に俺が着ていた学ランとワイシャツが血まみれになっていた。やっぱり心臓貫かれても死んでない（この世界において）ということとは、ここはやっぱりここは死後の世界なのか。俺やっぱり死んだのか。生前の記憶全然ないけど。

もうちょっと寝ようかなーと思った時、

ガラッ

「あら、起きたのね」

中に入ってきたのはゆりであった。

寝ようと思ったのに…

「ああ」

「それにしても氷室君、なかなかやるわね」

「何が？」

「昨日のことよ。天使と互角に戦ってたじゃない」

「いや。なんかなんとなく相手の動きが読めて…」

「ふん」

自分でも驚きだった。俺は生前何をやってたのだろうか。軍隊にも入ってたんじゃないのか？ …いやないか。

「それより俺は聞きたいことが」あつこれ。戦線の制服だからあとで着替えという」

少しは俺の話を聞いてくれ…

俺はゆりからブレザーの制服を渡された。

俺はもう入隊する前提かよ。まあ、昨日のことがあったからまあ、いいけど。

「んじゃ、今着替えるわ」

俺はベットから降りて、着ているズボンを脱ごうとしたとき

「ちよっ／＼／＼ 何女の子の前で堂々と脱ごうしてるのよー！
」

と頬を赤くしながらゆりは俺に言ってきた。

「あ、いや。わりいー。お前を女だって全然認識してなかったら…
…」

「それはどういうことかしら？」

ゆりは手首をポキポキしながら満遍な笑みをして言ってきた。ゆり
さん… マジで怖いですよ。

「ゆり。暴力はなしにしよう」

「死ねー！ー！！！」

俺は顔面にパンチをおもいつきりくらった。
ゆりは保健室を出てしまった。マジでいてー。

「……。とりあえず着替えてここを出るか」

俺は着替えて保健室を出た。

保健室を出たすぐ目の前にゆりがいた。
待っててくれたのか。

「あの…。さっきはゴメン」

「…さっきのパンチでチャラでいいわよ。それより行きましょ」

「どこに？」

「私たちの本拠地へ」

俺たちはゆりの言う本拠地へ向かった。

「そういえば昨日誰が俺のことを保健室に運んでくれたんだ？」

「私と日向君って言う人よ」

「そうか。ありがとな、ゆり」

「えっ／＼／ 氷室君が素直にお礼を言うとは…」

「言っちゃ悪いかよ」

「いや、別に…／ 天使を欺くの大変だったんだからね／＼！」

少し頬を赤くしながらゆりは言った。

そうか。あとで日向っていう奴にもお礼を言わないとな。

〈ゆりside〉

もう。あんな笑顔でお礼を言われて、ちょっとドキドキしちゃったじゃない。氷室君、けっこうカッコいいかも… って私なに考えてるんだろ。まあ、頼りにはなりそうね。

〈氷室side〉

「えっと… ちょっと質問していいか？」

「あ、でもそろそろ着くから」

「そうか」

まあ質問はあとでいいか。

「さあ、着いたわよ」

「ってここ校長室じゃないか」

「そうよ。そしてここが死んだ世界戦線の本拠地よ。天使の侵入を一度も許した事がないわ。ちなみに組織名を元に戻したわ」

「そうかい」

っていつかどれだけ名前にこだわっているんだよ…。

「とりあえず入るか」

「あ…。ちよつと待っ…」

「ん？」

俺がドアノブに触れた瞬間、巨大なハンマーが俺に目掛けてとんできた。

「ちよつ。あぶねーじゃねーか！……！」

なんとか自分の瞬発力でかわした。

「言っつの忘れてたけど、ドアに対天使用の罫がしかけてあるから」

「言っつのおせーよ……!!」

「てへっ」

「てへっ　じゃねーよ!!　危うく吹っ飛ばされそうになったじやねーか……!!」

「いやー。ごめんごめん。これには合言葉が必要なのよ。『神も仏も天使もなし』　これでもう大丈夫よ」

「神も仏も天使もなしか……」

俺はこの言葉を頭に刻み込んでおいた。

校長室に入ると俺とおんなじ制服を着た人達が何人かいた。

「おつ。こいつが新入りか」

長ドスを持った男が言ってきた。

「あの罨をかわすとは。凄いなー」

今度は青髪の男が言ってきた。

「彼が朝、私が言った新人よ。名前は氷室君よ。とりあえず皆、人ずつ自己紹介してって」

「じゃあまず俺から。俺は日向だ。見たどおり俺はかつこよ…」見たどおりちゃんぽらん奴よ」って全然フォローになってないぞ！」

「まあ、たまに頼りになる奴よ」

「よろしくな、氷室」

「ああ、よろしく、日向。そういえば、昨日保健室まで運んでくれてありがとな」

「いいってことだ。俺たちもう仲間だろ。」

「そうだな」

「俺は松下だ。よろしくな。」

「ああ、よろしく」

「彼は柔道が五段だから敬意を込めて、みんなは松下五段と呼んでいるわ。」

「松下五段か…」

「僕は大山。えっと…「特徴がないのが特徴よ」ははは…。よろしくね」

「ああ、よろしく」

「come on, let's dance!」

「いや。躍んねーよ」

「彼なりの挨拶よ。みんなはTKって呼んでいるわ。本名は誰も知らない謎の男よ。ちなみに彼、英語得意そうだけど実際のところ全然できないわ」

「そうか。よろしくな」

「Nice to meet you」

面白そうな奴ばかりだな。

「私は高松です。よろしく」

「よろしく」

「彼、頭良さそうだけどただの筋肉バカよ」

「そうなのか…」

「俺は藤巻だ。よろしくな。新人」

「ああ、よろしく」

「……………」

「えっと…」

「彼女は椎名さん。いつもあさはかなりいーと言っているわ。彼女は可愛いものに弱いわ」

「そうか」

「私は岩沢だ。よろしく」

「ああ、よろしく」

「彼女はガルデモのリーダー兼陽動部隊よ」

「ガルデモ？」

「ガールズ・デッド・モンスター。略してガルデモ。バンド名のことだ」

岩沢が言った。

「へえーバンドやってんのか」

「まあ、そのほかにも…」

ゆりが言おうと言った瞬間、ドアがバンツと開いた。

「おい、新人！ ゆりっぺが認めたからって俺は認めていな…」

ハルバードを持った男が喋ってる途中、ハンマーが彼に当たり、飛んで行った。

ああ… 罾が作動したんだな。

「自分で仕掛けた罾なのに…。アホだ」

日向が呆れて言った。

「さっき飛んで行ったバカは野田君よ」

「そうか」

「他にもメンバーは何十人かいるわ」

「へえー」

暫くみんなと話をした。

みんなとすぐに仲良くなるができた。まあ、納得してない奴約一名いるが…。

「まあ、今日はもう解散でいいわ。別にもうやる事ないし…。あと氷室君。あとで屋上へ来て。聞きたい事がたくさんあるんでしょ？」

「ああ」

ゆりが解散と言ったからみんな何処かへ行ってしまった。

……俺も行くか。

俺は屋上へ行った。

みんな面白い奴だな。

なんだか楽しくなりそうだな。

Episode 2 死んだ世界戦線（後書き）

みんなどんなキャラなのか全然わからない…

主人公設定（前書き）

オリ主の設定です。

イメージを崩されたくない方は見ない方がいいかも…

主人公設定

若干ネタバレがあります

・名前 氷室^{ひむろ}

・身長 177cm (日向よりわずかに高い)

・体重 65kg

・髪型 ガンダムSEEDのキラ・ヤマトみたいな

・好きなこと(もの) 寝ること 100%アップルジュース

甘いもの からかうこと

・嫌いなこと(もの) 特になし

・武器 主に日本刀

・顔 イケメン(本人自覚なし)

けっこうめんどくさがり屋。けどやるときはやる。頭はかなりいいけど、アホ。

日本刀をもらってからいつも背中に背負っている。少し鈍感。子供っぽい一面もある。男友達では日向と一番仲がいい。仲間思いである。

生前と下の名前はのちに明かすつもりです。

Episodes この世界について（前書き）

タイトルテキストですみません。

Episode 3 この世界について

「氷室 side」

俺は今屋上へ向かっている。ゆりが屋上で話そうと言ったからである。

廊下を歩いていたら、掲示板にガルデモのポスターが貼ってあった。

「バンドか」。今度演奏聞いてみたいな」

「ねえ。このポスターみてるってことは、ガルデモに興味あるの？」

突如ピンク色の髪の子が俺に話しかけてきた。

「あなたその制服着てるってことは戦線のメンバー？」

「ああ。今日入ったばかりだ。」

「あなたが新人さんね。あたしユイっていいいます。」

「俺は氷室」

「よろしくです。氷室先輩」

「ああ、よろしく」

先輩って言うてるからこいつ下級生か？」

「ところで先輩。ガルデモに興味あるのなんですか？」

「まあ、少しは……」

「あたしガルデモの超ファンでアシスタントをしてるんですよ。もおゝあたし岩沢さんのギターと歌が好きでー。特にC r o w S o n g が……」

こんな話が暫く続いた。

俺のポケットに入ってる携帯が鳴った。

「それで……」

「悪いユイ」

と言って俺は携帯を取り出し、電話にでた。

「もしも…「氷室君！　いつまで待たせるのよ！！」

」

「あ…。悪いい。今すぐ行く」

「１０秒で来なさい」

電話が切れた。ユイの話を聞いてたら、忘れてた…。ってか、いつの間に俺の番号知ったんだよ。俺にプライバシーはないのか…。

「悪いい、ユイ。今すぐ屋上へ来いとゆりが…」

「そうですか。わかりました。なんか呼び止めたりなんかしてすみませんでした」

「別にいいよ。ガルデモのことよくわかったし」

「そうですか。じゃあ頑張ってください」

「おう。じゃあ」

俺はダッシュで屋上へ向かった。
ゆりかなり怒ってるだろうな！。

俺はこの世界に来て一番のダッシュをした。

「はぁーはぁー」

「おそーい！！！！ 一体なにしてたのよ」

「ユイって奴に捕まってた。」

「全く…。まあいいわ。早速話をしましょ。でまず私から注意事項が」

「なんだ？」

「まず、授業や部活はともに受けてはダメよ。消える対象になるから」

「わかった」

「次に私たち以外の生徒…NPCノンプレイヤーキャラクターについていうんだけど、そいつらには基本、手を出しちゃダメよ。あくまで私たちの標的は天使よ。それが私たちのポリシーよ」

「NPCって…あのゲームとかで一定の会話しかない…」

「そうよ。例えて言うならばね。あいつらはもともとここにいる模範って意味よ」

「じゃあ話しかけても一定の答えしか返ってこないのか？」

「そんなことないわ。最初は私たちと違いがわからないはずよ。なんだったらそこらへんの女の子にカンチョーでもしてみたら」

「そうか。じゃあ…」

俺はしゃがんで、両手をあわせ、人差し指を伸ばし、ゆりにカンチョーしようとした。

「ちょっと…／／／何私にカンチョーしようとしてるのよ！／／／」

「お前がそこらへんの女の子にカンチョーしてみればと言われたから」

「人の話し聞いてた？NPCの女に決まってるでしょ！！」

そんなことわかっている。ゆりに殴られっぱなしだったからな。その仕返しだ！！

ゆりは俺のことを蹴ろうとしたが、自分の瞬発力のおかげでかわすことができた。

「隙ありー！」

グサッ

「あんっ／＼／」

俺はスカートの上からカンチョーすることに成功した。

「このっ… 変態がー！！！！！！」

俺はそのあとかなりボコボコにされたことは言っまでもない…

「……（この私がカンチョーされるとは…。一生の不覚だわ）」

「本当に悪かったから」

「……もういいわ。それで何か質問ある？」

「えっと…じゃあここって天国？ 地獄？」

「さあ。でも少なくとも地獄にはこんな立派な学校あるとでも？」

「確かに……」

「ここに来る人間は大抵、自分の人生が納得していない人が来るところよ」

「そうなのか……。ゆりも生前にいろんなことがあったのか」

「そうね」

「よかつたら聞かせてくれないか、ゆりの生前。嫌なら別にいいけど……」

「……いいわ、教えてあげる」

俺はゆりの過去を知った。

妹と弟を守れなかったことに後悔しているらしい。

「そうか……。でもゆりって強いよね。リーダーが務まってる訳がわかったよ」

「でも私は……」

「ゆりはなんも悪くねーよ。立派な姉だったじゃん」

「でも私はそんな人生にした神様を許さない。だから私は神様に抗っているの」

「そうか…」

ゆりがあんな過去があるくらいだからみんなもそのくらいの過去があるのか。ってことは俺も……。

「じゃあ天使に従ったら消されるって言うてたけど、消されたらどうなる？」

「生まれ変わるんじゃない？まあ、生まれ変わっても魂が人間に宿るとは限らないし。ミジンコとかになるかも」

「ミジンコ……。えつとあと……武器ってくれるの」

「ええ、もちろんよ。何か注文とかある？」

「じゃあ…日本刀」

「なんで日本刀？まあ、いいけど。一応銃も準備するわ」

「すまねえ」

「他に質問は？」

「腹って減る？」

「普通に減るわ」

「季節ってある？」

「あるにはあるわよ。ちなみに今は10月よ」

「寝るところは？」

「男子寮があるから後で日向君にでも案内してもらって」

「ゆりのバストは？」

「cmよ…って何言わせてるんじゃない！！！！」

「ぐはっ…」

また顔を殴られた。まあ100%俺が悪いけど…。

「まったく…。最初会った時は、普通の常識人だと思ったのに…。
またしてもアホが入ってくるとは…」

「悪かったな」

「で、もう質問は以上？」

「ああ」

「されじゃあそろそろ晩御飯の時間だから食堂で一緒に食べましょ。
はいこれ食券」

「おっサンキュー…ってこの食券ライス（中）じゃん」

「そうよ。私にセクハラ行為した罰よ」

「う…」

こうして俺の夕食はライスだけとなった。

ライスだけじゃ足りなかったので日向から肉うどんを分けてもらった。

俺は食後日向と寮へ行き、眠かったからすぐに寝た。

なんだかめっちゃ疲れた…

Episode 3 この世界について（後書き）

ちなみに寮は日向と同じ部屋ってことにしています。男子寮は基本2人部屋で設定しています。

氷室「なんで日向と一緒にの部屋？1人でゆっくり寝たいんだけど」

作者「まあまあ。落ち着け」

日向「そうだぞ」

作「日向はかなり喜んでたし」

氷「まさか…日向…ゲイなのか」

日「ちげーよ！！なんで俺が「それじゃあ」

氷・作「次回をお楽しみにー」

日「人の話聞けー！！！！」

Episode 4 オペレーショントルネード

く
作戦会議

会話文が多くなっちゃった。

どうしても空気のなるキャラがでてる…

基本主人公視点で行きます。

氷室 side

俺は昼寝をしようと屋上へ行った。

「いい天気だな。それじゃあ、さっそく寝るか」

俺は横になり、睡眠を始めた。

30分後…

ピピピ… (着信音)

俺の携帯が鳴った。

でるのめんどい…

ピ (携帯にでる音)

「もしもし…」

「氷室君？ 今すぐ本部に来て」

「却下」

ピー（携帯をきる音）

俺は携帯をきった。

もうちょっと俺は昼寝がしたいんだよ。

ピピピー…（着信音）

「はあ」

ピー（携帯にでる音）

「もしも「来なかった場合ぶっ殺…」

ピー（携帯をきる音）

「はあ」

ため息を2回もしてしまった。…行くか。ぶっ殺されたくないし…

俺は校長室へ向かった。

「うーす」

「おせーぞ！」

藤巻が言った。どうやら俺が一番最後に来たらしい。

「わりーわりー」

「来たわね」

今度はゆりが言った。

「はい、これ。刀と銃よ」

「サンキュー」

俺が注文しといた武器をもらって刀は背中にしよい、銃は懷にしまった。

「おっ。刀か。なんで刀にしたん？」

日向が聞いてきた。

「まあ、なんとなくだよ。なんというか…。刀が好きなんだよ」

「そうか」

「そういえばゆり。武器ってどこで作ってるの？」

「ギルドっていう地下で作っているのよ」

「今度お礼でも言いに行くわ」

「そう。今度案内するわ」

「ところで今日の作戦はなんだ？」

藤巻が言った。

「そうね。じゃあ始めましょうか」

ゆりが言つと辺りが暗くなり、スクリーンが出され、いかにも作戦会議って感じになった。

「今日は氷室君が作戦に慣れてもらうために、いつもやっている簡単な作戦に参加してもらっわ。その名も…オペレーショントルネード」

「ええっ」

「うゝむ。こいつはでかいのが来たな」

大山、松下五段が言った。

「トルネード…。それってどんな作戦なんだ？」

「生徒から食券を巻き上げる…！」

「その巻き上げるかよ…！」

思わずツツコンでしまった。
生徒から巻き上げるなんて…

「それ要するにかつあげだろ？」

「まあ、そうね」

「武器や頭数だけそろえてあげくの果てにかつあげとは…。あきれ
るぜ」

「貴様。それはゆりっぺに対する侮辱発言だ。今すぐ撤回しろ」

野田がつつかかってきた。

「うるせえ！　ってかそんな危ないもの振り回すな」

「んだとぉー！！」

「まあまあ、落ち着け2人とも。」

「oh、野田っち、氷室っち。relax」

「そつだよ、野田君、氷室君」

「あさはかなり…」

日向、TK、大山、椎名がフォローしてくれた。

「我々は数や力で生徒を脅かしたりは決してしない」

松下五段が言った。

「続けていいかしら？」

「おう」

「氷室君は武装して所定の位置で待機。天使が来たらその進行を食い止めて。細かい位置はあとで大山君か高松君に確認して」

「あははっ」

「ふっ」

ゆりがそう言っていると、大山は俺に手を振り、高松は眼鏡をずらし、力ツコつけてきた。

「岩沢さん。今日も頼んだわよ。」

「了解」

「天使が来たら各自発砲。銃声が増援の合図になるから。氷室君、わかった？」

「ああ」

「作戦開始時刻は1830。オペレーション、スタート!!」

こうして俺の初めての作戦が始まった。
どうなるやら…。

作者「いやゝ。無事4話も終わりましたねゝ」

日向「そうだねゝ」

椎名「あさはかなり…」

作「小説書くの難しい…」

日「こちら側として毎日更新してほしいよ。なあ椎名っち」

椎「……」

日「なんかしゃべれよ!」

作「まあまあ。それじゃあ」

日・作「次回をお楽しみにー」

椎「あさはかなり…」

Episode オペレーショントルネード

ゝ実行編ゝ（前書き）

オペレーション実行編です

戦闘描写難しい

原作とは違うところかなりあります。
ってか最初から違うか

Episode 5 オペレーショントルネード

～実行編～

～氷室side～

作戦開始30分前

俺は食堂の外で日向と話をしていた。

「そういえば、俺銃の使い方わかんないんだけど」

「銃はこうして…こう撃つ!」

「ああ、なるほど」

俺はすぐに理解した。

「こうして…」おい、なんで銃口をこっちに向けてる?」

「撃つ!」

バンッ

俺は日向の頭を撃った。

日向よ……。安らかに眠れ……。

10分後

「フアーイ！？なんで俺を的にする？」

「いやー。手が滑った」

「どうみても確信犯だろ！」

「あー、もうそろそろ時間だからもう行くぞ」

「おいっ。人の話を聞けっ」

日向を無視し、俺の所定の位置、第二連絡橋へ向かった。

〔NO side〕

食堂は今、大勢の生徒でにぎわっていた。

「こちら遊佐。岩沢さん、照明と音響の準備出来ました」

遊佐は岩沢に電話をしていた。

「了解」

「よし、入江、ひさ子、関根、いっちょやるぞ！」

「「「おおー！」「」「」

「氷室 side」

俺は第二連絡橋で待機していた。

あーあー。俺もガルデモの演奏聴きたかったなー。

……暇だからゆりにでも電話しよ。

プルルル…

「もしもし、何の用、氷室君？」

「あ…（暇だったから電話したって言ったら、確実にぶん殴られる。作戦中だし） えーと……………ゆりと話があったから電話した」

「え…／／／／い、今作戦中よ／／／／用もないのに電話してこないで／／／／」

「へーい」

ガチャ…（電話をきる音）

やっぱり怒られた…。

くゆりsideく

氷室君作戦中に何用も無いのに電話してきてるのよ。まったく…。でもわたしと話したくて電話したって…ってなに考えてるのよ私／／今は作戦に集中しなきゃ。

く氷室sideく

「ふわー……」

俺はあくびをしていた。暇だなー。

「そこで何してるの？」

「ん……うわっ！！ 天使じゃん。お、お前こそなにやってんだよ？」

「今食堂でが大変なことになってるから、それを用意しに」

「……悪いな。俺はお前をここで足止めするためにここで待機してたんだ」

「……そう」

「ってことで帰ってくれ」

俺は銃を構え、天使に撃った。

バンッ

見事腹に命中した。

「よし」

すると…

「Guard Skill」

天使の傷はいとも簡単に治ってしまった。

「ええー！！ チートじゃんその能力」

天使の能力…ずるい…

「…Hand Sonic」

あの時のように、両方の手首から刃物がでてきた。けど今回は…俺も武器を持っている。

俺は背中に背負ってた日本刀を抜いた。

「よつと」

「……」

キンッ

俺の刃と天使の刃が交じあった。

キンッ キンッ キンッ

何度も刃と刃が交じあった。

以外と動きについていける。

これならなんとか…なる訳ないよな…。

く日向 side く

俺は食堂の前で待機してた。

バンッ

「おい今向こうの方で発砲したぞ」

野田が言った。

「向こうの方って氷室がいる場所じゃん」

これは少し痛いところに攻められたな！。

「援護しに行くぞ」

俺、野田、TK、松下五段、大山、藤巻で援護しに行った。

＼氷室side＼

キンッ キンッ

ああークソ。めんどくせー。早くみんな来いよ。

「おい、よけるー!!」

おっ。ようやく来たか。

「わかった」

俺はみんなのところにいった。

「撃てー！ー！！」

日向の合図でみんなが撃った。

「Guard skill」

だが、弾ははじき返された。

「チツ……」

「待たせたな！」

「Get you little kills！」

「こっちの弱いところをつかれたんじゃないかあー！？」

「でもまだハンドソニックだけだよ」

「うーむ」

日向、野田、TK、松下五段、大山、藤巻がかけつけて来てくれた。

「いやー、助かったよ」

「けどお前けっこう余裕そうだったじゃん」

日向が言ってきた。

「んなことねーよ」

「みんなあ広いところへ行くぞ」

藤巻が言った。

松下五段がロケットランチャーを吹っ飛ばし、広い所へ逃げた。

その後、椎名、高松がかけつけてくれた。
けど俺らはおされてた。
俺はゆりに電話をした。

「おいっゆり！　まだか？」

「もうそろそろよ。一回きるわよ」

あ…きれた。早くしてくれ…。
腹減った…。

くゆりsideく

その頃食堂は…

ライブは最高潮に達していた。

「そろそろ頃合いね…。回せ」

私は遊佐さんに指示をだした。

「回して下さい」

遊佐さんはさらに別の人に指示をした。

巨大扇風機が回り始まった。そして食券が勢いよく舞い上がり、外の方へ飛んでいく。

「とりあえず、作戦は成功ね」

「はい」

遊佐さんは言った。

「氷室 side」

突如紙が食堂から飛んできた。
そして俺はその紙を拾った。

「ああーこれ食券かー。もう何枚か拾ったとこー」

「氷室。とつとと行くぞ」

日向が言った。

「おう」

俺たちは食堂へ向かった。

食堂にて…

俺はゆりと日向と食事することにした。

俺は麻婆豆腐を頼んだ。

「にしてもこの麻婆豆腐やけに赤いな」

「え…氷室君麻婆豆腐にしたの!？」

「ご愁傷さまだ…」

二人とも何言ってるんだ？

「まあとりあえずいただきます」

パクッ

「……………」

「ん…うつ。辛い…けど意外とうまいかも…」

「無理しなくてもいいぞ」

「そうよ」

「本当にうまいぞ。ほれ、二人とも食ってみろ」

俺は麻婆豆腐を蓮華れんげですくい、まずはゆりに差し出した。

「いいわよ別に…」

「ほれあ〜ん」

「あ〜んじゃないわよ／＼／＼恥ずかしいじゃない／＼／」

「ゆりっぺが照れてる…。これはレアだ！」

「う、うるさい／＼／」

「ほれ」

「…………じゃあ」

パクッ

「う…辛い…けど美味しい…」

「だろ！ ほらー。日向も食べ」

「じゃあ…」

「辛いけど…たしかにうまい」

「だろ!!」

「……／／／／」

そして俺らは食事を終え、俺と日向は寮へ戻った。何故かゆりはずっと黙っていた。

「にしてもゆりっぺにあぐんをするなんて。流石だぜ氷室。ゆりっぺデレてたし」

「そうか？あぐんしちやまずかったか？」

「……鈍感だ」

意味がわからん…。

こうして俺の初めての作戦は終止符を打たれた。

眠いから寝よ……。

くゆりsideく

氷室君にあぐんをされてしまった。少し恥ずかしかったけど…嬉しかった…

また何考えてんだろ私。

………寝よ。

Episode オペレーショントルネード

（実行編）（後書き）

作者「無事オペレーショントルネード編を終えることが出来ました
」

遊佐「ちょっと私の出番が少ないです…」

作「まあそりゃーサブキャラだから」

遊「もっと出番増やしてください」

作「でも…増やしてください」

作「……考えておきます」

遊「それじゃあ…」

作・遊「次回をお楽しみにー」

Episode 6

鬼ごっこ(前書き)

更新遅れてすみません。

誤字脱字がありましたら、言ってください。

Episode 6

鬼ごっこ

氷室 side

今俺たち戦線のメンバーは校長室に集合していた。もちろんゆりに呼ばれたからである。

「みんな集まったわね？」

「ああ、んで今日は何をやるんだ？」

藤巻が言った。

「今日は…鬼ごっこをやるわよ」

「鬼ごっこってあの鬼ごっこか？」

「ええ、そうよ。まあこの鬼ごっこは氷室君の実力を見るための鬼ごっこだから」

「俺の？」

「ってことは普通の鬼ごっこはルールは違うわけですね」

高松が言った。

「その通りよ。まず鬼は逃げてるものにタッチするのではなく、倒すのよ」

「ってことは武器を使っているのか？」

野田が言った。

「もちろんよ。あ、ちなみに逃げるのは氷室君で他はみんな鬼よ」

「おい！！　どういうことだよ！？」

「言ったとおりよ。氷室君も攻撃していいわよ。倒された人はその時点でリタイア。氷室君が私たち全員倒すか、逃げ切れたら、あなたの勝ちよ。逆に氷室君がやられた瞬間私たちの勝ちよ。」

「これただ俺に対するいじめじゃないか！！」

「貴様。ゆりつぺが言ったことを否定するのか？」

野田がハルバードの刃を向けてきて言った。

「どうみても俺のほうが不利だろ！！」

「んなことどうでもいいんだよ!!!」

「落ち着けて。ゆりっぺ。確かに氷室1人はきつくねーか？」

日向がフォローしてくれた。いやー、本当にありがとう。

「そうね。じゃあ日向君も逃げる方ね」

「やっぱいいわ」

「…この裏切り者……!!!」

「悪いな」

「制限時間は3時間よ。逃げれる範囲は……まあ常識の範囲内ではい氷室君とつとと逃げる。5分後にスタートよ」

あーもう、手抜こう。

「ちなみに手を抜くような愚か者は後で地獄を見せるわよ」

う……。手を抜くわけにはいかないらしいな。

「それじゃあ…スタート！！！」

＼NO side＼

「行ったわね。あんたたち…負けたら1週間断食ね」

「……………う……………」

こうして地獄の鬼ごっこが始まった。

＼氷室side＼

あーもうゆりの野郎…あんな理不尽な鬼ごっこやつてられるか！！
と言いたいけど、地獄をみたく無いので、とりあえず頑張ってみるか。

ちなみにこれに参加してるのは、ゆり、日向、野田、高松、TK、
松下五段、大山、藤巻、椎名、遊佐の10人である。（俺除く）

「とりあえずテキトーに逃げるか」

俺はとりあえずグラウンドに逃げた。

俺は今グラウンドでぶらぶらしていた。
暇だなー。
すると…

「大山じゃん」

「あ…」

大山はポケットからトランシーバーを取り出した。

「氷室君発見。場所はグラウンド」

「やばっ。すまない大山」

「うわー!!」

俺は日本刀を抜き、大山を斬った。
すまない…。そうしている間に藤巻と高松が来た。

「おい、大山がやられたぞ!!」

「何ということですか」

「いやっ…悪りいー」

「大山のかたきだ!!」

「ここで倒されてください」

藤巻は長ドスを、高松は銃を構えた。

「俺…負けんの好きじゃないから…本気だすわ」

「…!!」

くゆりsideく

私は大山君から報告を受けて、グラウンドへ向かった。
向かうと、大山君はすでにやられていた。

高松君と藤巻君がそこにいた。

……私は見た。

目に見えない速さで彼ら2人を斬ったところを。
私は思わず目を疑った。

「嘘…？ 彼こんなに強かったの？」

ある程度の戦闘力はあると思ってたけど、まさかここまでとは…
これはかなり期待できる。
とりあえず私はもう少し様子を見ることにした。

大山、藤巻、高松、脱落。

〈氷室 side〉

俺は今第二連絡橋の下でアップルジュースを飲みながら休んでいた。

「やっぱアップルジュースうまいわ」

その時、俺の飲んでいたアップルジュースが爆発した。多分、銃で

打たれたのだろう。

「そこまでだ!!」

「観念するんだな」

「finish!」

「野田、TK、松下五段…。よくも俺のアップルジュースを…」

「悔しかったら俺らを倒してみろ」

野田がハルバードで俺に斬りかかってきた。

「じゃあ…そうさせてもらっわ」

俺は野田の攻撃を避け、野田を日本刀で斬った。

「ぐはっ」

「まずは1人」

「ぐっ…。怯むなTK」

「OK」

松下五段とTKが撃とうとしたが、そのまえに俺が銃を斬った。

「何だと…」

「w o w」

そして俺は2人を斬った。

「あースッキリした。俺のアップルジュースをこんなにしたからこうなるんだよ」

その時、俺の後ろからクナイがとんできた。
俺はなんとか避けた。

「こんなの投げる奴は…椎名しかいないか…」

「氷室…ここでやられてもらおう」

「……しゃーないなー」

けど女の子を斬るわけにはいかないな。
……そうだ。

「悪い椎名」

「!!」

俺は椎名の背後にまわり、日本島の柄^{つか}で頭を打って気絶させた。

「本当に悪い」

俺はこの場を後にした。

野田、TK、松下五段、脱落。
椎名、気絶中。

俺は屋上に行こうとした。

俺は時間が過ぎるまで、ここで寝よう。
屋上に来てみると、

「あら、氷室さん来ましたね」

「お前は確か…遊佐か」

「はい。直接話すのは初めてだと思います」

「そうだな」

「じゃあ…ここにくたばってください」

「いやだ」

バンッ

遊佐が銃で撃ってきた。

「あぶねー」

俺は刀を抜き、柄で遊佐を気絶させた。

「また悪いことしたなー」

「そうだな」

突如日向が現れた。

「お前も俺を…」

「俺はお前のことを撃ちたくないが…。ちゃんとやらないと、ゆりっぺに怒られるからな」

「俺は……お前のことを撃つけど…」

俺は銃を取り出し、日向のことを撃った。

「ぐはっ」

これ以後は…ゆりだけじゃん。もう余裕だな。

「んじゃ、とつと終わらせますか…ってなんでこんなところにアップルジュースが」

屋上の出入口にアップルジュースが置いてあった。

「とりあえずいただきまーす」

アップルジュースを手にとると、突如アップルジュースが大爆発をおこした。

「ぐ……畏だったとは……」

「ちょろいわね」

「やっぱりゆりか……」

「ええ」

ちくしょー。ここまできて負けたくない。
俺は立ち上がり、刀を抜いた。

「ゆり……。覚悟……」

「ちょっとまだやるの?」

俺はゆりを斬りかかろうとしたが、俺は気を失い、ゆりを押し倒してしまった。

「ちょっと／＼／＼ 何してるのよ／＼／＼」

「……………」

「氷室君ったら／＼／＼」

「……………」

ゆりside

私は改めて氷室君の実力を知った。

彼はアホだけど強い奴だとわかった。

でもまさか最後にあんな単純な罠にひっかかるとは…。更に私のことを押し倒すとは…。／／／

緊張したー／／／

復活した日向君に見られて、からかわれたので、蜂の巣にしまった。けど…少し嬉しかった。

なんだろうこの気持ち…。

私以外のメンバーを1週間断食（水分含む）にしたのは、また別の話…。

Episode 6

鬼ごっこ(後書き)

作者「いやー、ゆりっぺさん。おあついですなー」

ゆり「ちよつと何作者までからかっているのよ。殺すわよ」

作「誰のおかげでこういうことができているのかなー？」

ゆ「……。次もよろしく頼むわ」

作「ラジャー。ってことで」

作・ゆ「次回をお楽しみにー」

E p i s o d e 7

天使エリア（前書き）

原作とはかなり違います。

Episode 7 天使エリア

氷室 side

俺はいつも通り校長室で作戦会議が行われてた。にしても九日校長何も言わないのか？

「今日の作戦は……天使エリアの侵入よ」

「天使エリア……」

一体どんなところだろう……。

「……今私たちの弱点はなんだと思う？氷室君」

「は？えーと……俺以外馬鹿なところ」

「惜しいわね。あなたも含め、馬鹿なところよ」

「少なくともおまえよりよりは頭はいい」

「なんですってー！？……ってそれより……今回は頭がいい彼を作戦に同行させるわ」

「よろしく」

「イスの後ろから!？」

大山が言ったとおり、ゆりが座ってるイスの後ろから現れた。

「彼はコードネーム竹山君よ」

「こんな奴が本当に戦力になるのか!？」

「3・14159265358979323846…」

「ぐおー」

「円周率だと!？」

「やめてあげて。彼はバカだから」

松下五段と大山が言った。

野田…。本当にバカなんだな…。

「竹山君。よろしく頼むわよ」

「僕のことはクライストと呼んで下さい」

「こっちがコードネームじゃね？」

「台無しだな」

俺と日向がツッコんだ。

「生徒が大勢いるとやりずらいから、岩沢さん、今回も頼むわ」

「了解」

「天使エリアに侵入するのは…私、竹山君、日向君、松下君、野田君、氷室君。他は天使の動きを止めといて。それじゃあ、作戦開始
！！」

こうして、作戦が開始された。

現在俺たちは女子寮にいる。

「…よし開いた。いいわよ」

俺たちとはある部屋に入った。

「あの…ここは？」

「ここが天使エリアよ」

「これただの女子の部屋荒らしだろ！！ やっていいこととやっちやいけないことがあるだろ！！」

「ゆりっぺにはむかうのか！？」

「バカは黙ってろ！！」

「んだとー！！」

「まあまあ。落ち着けて」

「そうだぞ」

日向と松下五段が止めにかかった。

「「けどよ…こいつが悪いんだよ！！」」「」

「てめーら2人ともうるせー！！！！ 少しは黙ってろ！！！！」

「すまん、ゆりっぺ」

「てめーの方がうるせーよ」

「ああん!？」

「……ごめんなさい」

「んーやっぱりパスワードがかかってる。竹山君、頼んだわ」

「わかりました。後僕のことにはクライ「早く」はい……」

竹山はパスワードを解析しはじめた。

「解析完了です」

「よしっ。よくわかったわ」

「当然です。あと僕のことにはクライ「早く怪しいファイルを開けなさい」……わかりました」

ファイルを開くと何やら名簿らしいものがでてきた。

「これは名簿……。NPC……いや私たちもあるわね」

「空振りか？」

「んー。竹山君、もうちょっと調べてみて」

「了解です」

ピピピイ…。

突如電話が鳴った。

「あ、ごめん。私のだわ」

ピイ…

「もしもし？」

「大変です。天使がゆりっぺさんたちの方に向かいました」

「わかったわ。ありがとう高松君」

ピイ…

「みんな。天使がこちらに向かっているわ。撤収よ」

「了解」

俺たちは天使の部屋をあとにした。

女子寮を出ると、そこに天使がいた。

「ここで何をしているの？」

「くっ。もう作戦は終了よ。逃げるわよ」

「俺がおとりになる。みんなは早く逃げろ」

「氷室君…わかったわ。みんな行くわよ」

「悪い」

「ありがとう」

「すみません」

「おまえにしちゃーやるじゃねーか」

みんな行っただか…

「……………」

「……すみませんでしたー！！！」

俺は天使に土下座した。

「勝手にあなたの部屋に忍び込んでしまいましたー」

「……そう」

天使は寮に戻って行った。

許してもらえたのか？

「まあ…いつか」

俺は本部へ戻った。

「今回の収穫は…ゼロよ」

「そうですね」

高松が言った。

「なあ。なんで天使の部屋に侵入したん？」

「天使に関する情報収集よ。どうやって神様と連絡をとっているのか」

「なるほどね」

納得していいのか俺。

こうして本日の作戦も終了した。

なんか疲れたから今日は早く寝よ。

Episode 7 天使エリア（後書き）

作者「いやー、今回もなんとか終わりました」

天使「うん。それより少しは私の出番が少ないような気がする」

作「まあ、あくまでメインヒロインはゆりっぺなんで。でもそれなりの絡みは入れていくつもりです。納得した？」

天「……うん」

作「えっと、それじゃあ……」

作・天「次回をお楽しみにー」

Episode 8 潜入

氷室side

「よし、作戦決行だ」

「おうっ」

俺と日向はある決心をした。

ゆりの部屋に侵入することを。

前回はあんなに女子の部屋に侵入することを否定してたのに何故か
って？

それは…

「頑張ってモンハンを取り返すぞー！！」

「おおー！！」

そう。モンハンを取り返すためである。

昨日、俺、日向、大山、藤巻で作戦会議中なのに、モンハンをやっていた。

案の定、ゆりに見つかった。大山と藤巻は逃れたが、俺と日向のp
spが没収されてしまった。俺たちの唯一の楽しみが奪われたので

ある。

「あの時もう少しでジンオウガを倒せたのに…」

「そうだな。行こう。俺らの楽しみを取り返しに」

こうして俺と日向は、女子寮へ向かった。

俺と日向は女子寮の前まできた。

「これバレたら殺されるよな？」

「大丈夫だ。殺されてもまた回復するから」

それもそうだな。

「よし、行くか」

「おう」

俺と日向はゆりの部屋へ向かった。

俺たちは今廊下を歩いていた。

ちなみにNPCの女子は今学校で授業中である。

「おまえらここで何をやっている?」

「何って…椎名っち!」

「椎名!」

「ああ。で何をやっている?」

「いやっその…。ゆりっぺに用があって…」

日向が一生懸命説明している。

「そうか。呼び止めて悪かった」

「いってことだ。じゃあなー」

椎名が行った。

「ふうー。危なかったー」

「先を急ごう」

「ああ」

「ここで何してるんですか」

「ってユイ!？」

「今度はユイかー」

「こんにちは。ひなっち先輩、ひむっち先輩」

「ひむっちって……」

「ところでここで何をしてるんですか？まさか私たち女子を襲いに……」

「ちがーう!！」

「まあ、私に魅力を感じちゃうのはわからなくもないけど……」

「てめーなんかに興味なんてねーよ」

「なんだとー!！ もういつぺん言ってみやがれ!！」

「ああ!！ 言ってるよ!！」

「はいはい、もういいだろ。ユイ、実はな…」

今度は俺が説明した。

「なるほど。ちゃんとゆりっぺ先輩に許可をもらってるわけですね」

「ああ、そうだ」

「呼び止めてすみませんでしたー。それじゃあ、また」

「ああ」

「……行っただか」

「危なかったー」

「先急ごう」

「ああ」

「ここを曲がった先がゆりの部屋か」

「ああ、そつだよ」

ちなみに今ゆりは部屋にいない。
藤巻と大山の協力でゆりを足止めしてもらっている。

「よし、もうすぐだ」

「ここで何をしているんですか？」

「今度は遊佐かよ」

「何男子禁制の女子寮に入っているんですか？ 今すぐ通報します」

「待ってくれ！ これには訳があつて…」

俺は一生懸命遊佐に説明した。

「……わかりました。今回は見逃します」

「ありがとう」

「それじゃあ」

「じゃあねー…………。ふうー」

「早く行こうぜ氷室」

「ああ」

俺たちはゆりの部屋を目指した。

「ここがゆりの部屋かー」

「ああ。そういえばどうやってドア開ける？俺ピッキングなんてできねーぞ」

「俺ができる」

「さっすがー氷室」

そう。俺は何故かピッキングができた。俺は生前何をしてたやら…。やっぱり思い出せない…。俺はゆりのドアを開けた。

「普通部屋だなー」

「日向、お前はどんな部屋想像してたんだよ!？」

「何って…。あつたぞpspが」

ゆりの机の上にあった。

「よし、さっさとずらかるっ」

その時、

ピピピイ…

「悪い。俺の携帯だ」

俺の携帯が鳴った。

携帯を見ると、藤巻からであった。

「もしもし？」

「大変だ。大山がゆりっぺに脅されて作戦がバレた」

「なにー！？」

「今ゆりっぺが氷室たちのところへ行った。早く逃げろ！」

バンッ（ドアが開く音）

「氷室君、日向君。覚悟はできてる？」

「…どうやら遅かったらしいな」

「ああ。一回切る」

「あなたたち。勝手に私の部屋に入るとは…。これは、死にたいってことかしら？」

「いや俺らすでに死んでるし…」

日向が言った。

「お前だって天使の部屋に勝手に入ったじゃん」

「それとこれとは別よ」

「よし、日向、あれやるか」

「そうだな」

「「せーの」「」

「「すみませんでしたー！！！！」」

俺たちは土下座して必死に謝った。
当然ゆりは許してくれなかった。

俺たちはボコボコにされ、更に1週間断食された。マジで死にそうだった。まあ、もう死んでるけど…。

Episode 8 潜入（後書き）

作者「……2人とも大丈夫か？」

氷室・日向「……」

作「…ダメだこりゃ。ゆりっぺ恐るべしだな。それじゃ、次回をお楽しみに」

氷・日「……」

Episode 9 立華 奏

氷室 side

俺は今食堂で夕食を食べようとしていた。
カレーライスを頼み、席を探していた。

「けっこう混んでるなー」

ほとんど空いてる席が無い。

「おつ、そこに空いてる席があるじゃん」

2人まで座れる席が空いていた。

俺は席に座り、

「んじゃ、いただきます」

「混んでるから相席いい？」

「別にいいよ…って天使さん？」

「……（天使じゃないけど）」

天使が俺の目の前に座ってきた。

「……………」

「……………」

会話がない…。かなり気まずい。
ってか天使はあの激辛麻婆豆腐を平然と食べてるけど、大丈夫なのか？

「なあ…。辛くないのか？」

「別に……………」

「……………」

「……………」

会話終了……。…どうするか？
よし、

「お前天使って言われてるけど本当の名前はなんていうんだ？」

「……立華 奏」

立華 奏……。あれ…俺この名前なんとなく聞き覚えがある…。な
んでだろう…。……だめだ、思い出せない。

「なあ…。俺と立華って生前とかに会ってたりしてる？」

「！」

この反応…。やっぱり何か俺の生前のこと知ってる。

「なあ…立華…。俺の生前のこと知ってるんだろ。だったら教えて
くれ！！俺は何者なんだよ！！」

俺は思わず立ち上がってしまった。

「……」

「…悪い」

俺は席に座った。

「…私は確かにあなたの生前のことを知ってる。けどそれは言えない」

「なんで？」

「私はあなた自身で思い出して欲しいの、氷室君」

「あ…俺の名前…」

立華は俺の名前（苗字）を知っていた。

やっぱり俺と立華は何かしらの関係があることは確かだ。

「……わかった。まあ、ゆっくり思い出していくよ」

「うん」

「ヒントくれてありがとな」

「そんなことない。私も早く氷室君の記憶を取り戻して欲しいの」

「そうか」

俺は夕食を終え、寮へ戻った。

…俺って何者だろう。

次の日

俺はゆりと屋上で話をしていた。

「んで、どうしたんだ、ゆり？」

「いや、なんか最近疲れちゃってー」

「まあ、ゆりはリーダーだし。本当に偉いよ」

俺はゆりのことを撫でてやった。

「ちょ／＼／ 恥ずかしいじゃない／＼／」

ゆりの顔が赤くなった。

「ゆりの赤くなった顔、けっこうかわいいなー」

「なっ／＼／」

ゆりの顔がますます赤くなった。

「話を変えていいか」

「えっ、何？」

「俺って何者だと思うっ？」

「ただのアホ」

「そうじゃなくて。実は昨日…」

俺は昨日立華との出来事をゆりに話した。

「ふーん。こんなことがあったんだ」

「ああ。で、どうすればいい？」

「どうするも何もまあ、ゆつくりでもいいから思い出したほうがいいんじゃない？ 天使さんのためにも」

「そうだな。ありがとな」

「別にいいわよ。そのくらい」

突然、強い風が吹いた。

その風でゆりのスカートの中が見えそうになった。ってか見えた。
ピンクの縞パンだった。

「…見た？」

「…見ちゃった」

「この変態がー／／／」

「ごめんなさいー」

俺は屋上から飛び降りて逃げた。
その衝撃で骨が折れた。
まあ、すぐ治るけど。

くゆりsideく

氷室君にパンツ見られた／／／
めちゃくちゃ恥ずかしい。

けどかわいって言われたときはすっごいうれしかった。生徒会長と氷室君ってどういう関係かしら？　なんかムカムカする。私、いつの間にか氷室君のことばかり考えている。やっぱり私、氷室君のこと……

＼氷室side＼

俺は今外をぶらぶらしていた。

「おっ、あそこにいるのは立華じゃん。おい」

「氷室君」

「何してたん？」

「お花の世話」

「そうか、花好きなのか？」

「うん」

「なあ、少し話しない？」

「いいよ」

俺と立華は近くのベンチに座った。

「お前って不思議な能力持ってるよなー」

「うん。確かに特殊な能力。ところで、なんで敵である私に話かけるの」

「そりゃー俺とお前が何らかの関係があるからじゃね？」

「そう」

こんな感じで立華と会話をした。

「付き合わせて悪かったな」

「別にいいよ」

「そうか。じゃあ俺もう行くから」

「そう」

「じゃあなー」

「うん」

俺はとりあえず寮へ戻った。

俺の記憶を思い出す第一歩を踏み出した…はず…。

E p i s o d e 9 立 華 奏（後書き）

やっぱり小説書くの難しい…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5639y/>

Angel Beats! + オリ主 ~ Another story ~

2011年11月24日19時49分発行